

高校生の志願先決定時期に関連する諸要因の検討

——東北大学入学者の分析から——

林 如玉, 宮本 友弘, 大野 真理子, 倉元 直樹, 長濱 裕幸 (東北大学)

本研究は、東北大学2024年度入学者を対象とした質問紙調査に基づき、大学志願先の決定時期に影響を及ぼす要因を検討したものである。なお、分析は進路選択のプロセスが比較的標準化されている現役で合格した入学者に限定して実施した。性別、出身地域、学問分野、選抜区分、進学イベント参加経験等との関連を分析した結果、志願先の決定は高校2年秋から3年夏に集中し、医歯薬系志望者やAO入試群では早期決定の傾向がみられた。これに対し、一般選抜や人文社会系では比較的遅い時期の決定が多かった。オープンキャンパスや進学説明会等の参加経験も志願先決定時期と有意に関連し、参加者が早期に決定する傾向が確認された。

キーワード：志願者動向, 志願先決定時期, オープンキャンパス

1 はじめに

現代社会において、高校生の進路選択は、単に次の教育段階を選ぶという行為にとどまらず、将来の職業観やライフプランそのものに関わる、極めて重要な意思決定の局面となっている(国立青少年教育振興機構, 2023)。近年の急速なテクノロジーの進展や、社会の予測困難性の高まりは、高校生に提示される選択肢を多様化させると同時に、進路選択のプロセスをより複雑なものへと変化させている。

特に大学進学に注目すると、四年制大学への進学率はすでに半数を超えており、大学進学は多くの高校生にとって主要な選択肢のひとつとなっている。一方で、大学進学の一一般化は、進学先となる大学・学部の選択肢の多様化と、それに伴う入試制度の複雑化をもたらしている(林・倉元, 2022)。このような状況下では、高校生は極めて多くの情報の中から、自ら進路を選択し、準備を進めていくことが求められている。

こうしたプロセスにおいて、「志願先をいつ決定するか(=志願先決定時期)」は、その後の学習計画や準備行動の内容、学習への動機づけ、さらには最終的な進路選択の成否にまで影響を及ぼす重要な要素であると考えられる。しかし、この「志願先決定時期」自体に着目し、どのような要因がその時期に影響を与えているのか、また、選抜区分や進学イベントの参加経験といった現代的な文脈をふまえた実証的な検討は、これまで必ずしも十分になされてきたとは言えない。

これまでの先行研究では、高校生の進路選択に影響を与える要因として、家庭の経済状況や保護者の学歴といった家庭的背景(荻谷, 2001; 国立教育政策研究所, 2021)、本人の学力や進路選択に対する自己効力感(永作・新井, 2001, 2002; 平田・杉山, 2003)、さらには在籍高校の進路指導体制や利用する入試制度な

どの学校的・社会的要因(リクルート進学総研, 2022)が指摘されてきた。また、志願先決定の時期の相違が、進路達成の度合い(山口, 2022)や進路選択に関する悩み(文部科学省, 2010)に関連していることも報告されている。

特に山口(2022)は、生徒の主体性を尊重する進路指導が、情報収集能力や進路意識における家庭背景の格差が志願先決定時期の差として顕在化する可能性を指摘し、進路格差の拡大という課題に言及している。これは、志願先決定時期の背景にある複合的な構造を明らかにする必要性を示しているといえる。しかしながら、選抜区分(一般選抜, 総合型選抜, 学校推薦型選抜など)の違いや、オープンキャンパスなどの進学イベント参加の有無といった具体的な行動との関連性を含め、大学入学データに基づいて志願先決定時期の構造を分析した研究は、現時点では限られている。

1.1 目的

本研究では、東北大学2024年度入学者を対象とした質問紙調査データに基づき、大学志願先の決定時期とその関連要因の実態を明らかにすることを目的とする。対象者の選抜区分、進学イベント参加状況、属性などの多変量データを活用し、決定時期に影響を与える要因の構造を明らかにすることを試みる。これにより、高校生の進路行動の多様性を踏まえた大学広報・進路支援の戦略的設計に資する知見を提供することが期待される。

2 方法

2.1 調査方法

本調査は、2024年度に東北大学の新入学者を対象として実施したものである。対象者には、郵便にて入

学手続き書類とともに調査票を郵送した。また、Web版（Google Forms）の調査票も用意した。紙版とWeb版のどちらで回答するかは、学生の任意とした。紙版で回答した場合は、オリエンテーション時に回収した。調査の実施時期は2024年4月～6月であり、無記名で行われた。2024年度の新入学者アンケートの有効回答者数は2,484人で、アンケートの回収率は99.4%であった。

本研究では、受験年度と意思決定時期が一致する現役で合格した入学者を分析対象とする。既卒生では意思決定が複数年度にまたがる可能性があるため、分析の一貫性を確保する観点から対象から除外した。

表1 現役浪人別の回答者数

	回答者数	%
現役	2,008	81.2
浪人	455	18.4
その他	11	0.4
合計	2,474	100.0

注) 無回答は除く

2.2 調査内容

新入学者アンケートでは、大学進学に至るまでの意思決定過程や情報接触状況、基本属性に関する多岐にわたる設問が設けられていたが、本研究ではそのうち以下の項目を分析に使用した。

志願先決定時期、選抜区分、対面型オープンキャンパスの参加経験、オンライン型オープンキャンパスの閲覧経験、進学説明会・相談会¹⁾の参加状況。加えて、入学した学部、性別と出身地域を変数として取り入れ、地域差・属性差を考慮した上での検討を行う。これらの項目は、以下のような構成で調査票に示されている。

まず、志願先決定時期では、「あなたが東北大学の受験を決定したのは、いつ頃でしょうか」という問いに対して、7つの選択肢²⁾（高校入学前／高校1年生頃／高校2年生の夏頃まで／高校2年生の秋頃から3年生になる前まで／高校3年生の夏頃まで／高校3年生の秋頃から共通テストの受験前まで／共通テストの受験以降）から最も適切な時期を1つ選ばせる形式となっている。この変数は、大学志望決定の早期性・遅延性を把握する中心的指標である。

選抜区分では、入学者がどの入試制度によって合格・入学したかを確認しており、AOⅡ期・AOⅢ期、前期日程・後期日程、その他の選抜から該当するものを選択させている。選抜区分は、志望決定のタイミングと密接に関係していると想定される制度的要因である。また、大学の情報提供機会として位置づけられイベン

トの参加経験については、対面型オープンキャンパスの参加有無、オンライン型オープンキャンパスの閲覧有無と進学説明会・相談会の参加有無を尋ねている。

3 結果

3.1 属性

性別の内訳は男子が67.9%（1,363名）、女子が32.1%（645名）であった。出身地域については、一部に無回答が見られたが、関東、東北、中部地方の出身者が多数を占めていた（表2）。

表2 出身地域別の回答者数

	回答者数	%
北海道	69	3.5
東北	658	33.0
関東	791	39.6
中部	331	16.6
近畿	90	4.5
中国	27	1.4
四国	10	0.5
九州	19	1.0
合計	1,995	100.0

注) 無回答は除く

表3 学問分野別の回答者数

	回答者数	%
人文社会系	620	30.9
自然科学系	1,059	52.7
医歯薬系	329	16.4
合計	2,008	100.0

注) 無回答は除く

また、入学学部については、11学部を人文社会系（文学部、教育学部、法学部、経済学部）、自然科学系（理学部、工学部、農学部）、医歯薬系（医学部医学科、歯学部、医学部保健学科、薬学部）の3つの学問分野に分類し、各学問分野の分布を表3に示した。

3.2 志願先決定時期の全体傾向

現役生を対象に、志願先をいつ決定したかを尋ねた結果を図1に示す。最も多かったのは「高校3年生の夏頃まで」であり、全体の21.4%を占めた。次いで「高校2年生の秋頃から3年生になる前まで」、続いて「共通テストの受験以降」、「高校1年生頃」、「高校3年生の秋頃から共通テスト前まで」の順であった。一方で、「高校2年生の夏頃まで」に決定した生徒も11.5%、「高校入学前」に決定した生徒も5.1%おり、比較的早期に志望校を定めた層も一定数存在する。

これらの結果から、志願先の決定時期は「高校2年秋頃から高校3年夏頃」にかけて最も集中しており、この時期が進路選択における主要な決定時期であることが示された。また、「高校2年生の夏頃まで」や「共通テストの受験以降」など、この集中していた期間より早い時期・遅い時期に志願先を決定する入学者も一定数存在し、志望決定のタイミングには多様性が見られた。

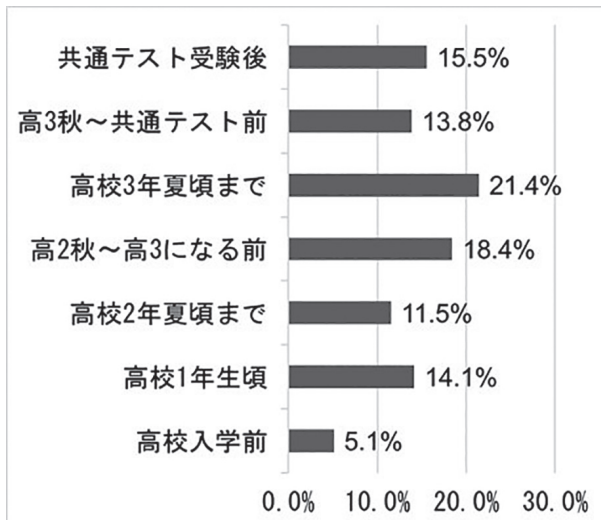


図1 志願先決定時期の分布

注) 割合は四捨五入のため、合計が100%にならない場合がある。

3.3 志願先決定時期に関連する要因の単変量分析

3.3.1 性別との関連

性別と志望決定時期の関係についてカイ二乗検定を行った結果、有意な関連が認められた ($\chi^2(6) = 14.12, p < .05$)。図2に示すように、女子は「高校2年秋～3年になる前」および「高校3年夏頃まで」に志願先を決定した割合が高く、男子よりも早い段階で志望を固める傾向がみられた。

一方で、男子は「高校3年秋～共通テスト前」および「共通テストの受験以降」に決定した割合が女子よりも高く、相対的に志望決定の時期が後ろ倒しになる傾向がうかがえた。

3.3.2 地域との関連

出身地域と志願先決定時期との関連を検討するために、統計的安定性を考慮した上、全8地域を以下の6区分に再分類した。すなわち、北海道、東北、関東、中部、近畿、そして人数が比較的少ない中国・四国・九州の3地域をまとめた「中国・四国・九州」である。

この6地域と志願先決定時期の関連についてカイ

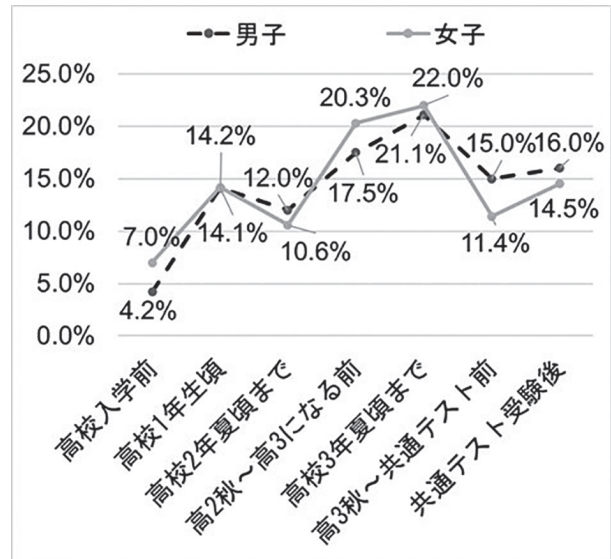


図2 志願先決定時期と性別

二乗検定を行った結果、統計的に有意な関連が認められた ($\chi^2(30) = 272.42, p < .001$)。東北地域では「高校1年生頃」に志望を決定した割合が24.4%と最も高く、調整済み残差から見ても統計的に有意に多い傾向が認められた。一方で、関東では「高校3年生の夏頃」や「共通テストの受験以降」に決定した割合が相対的に高く、特に共通テスト後に関しては顕著な遅れが見られる。また、近畿や中国・四国・九州においては、「高校3年秋～共通テスト前」および「共通テストの受験以降」といった遅期決定の割合が高い。これらの地域では、物理的距離や大学の広報接触の機会が限られる可能性も考慮される。(図3)

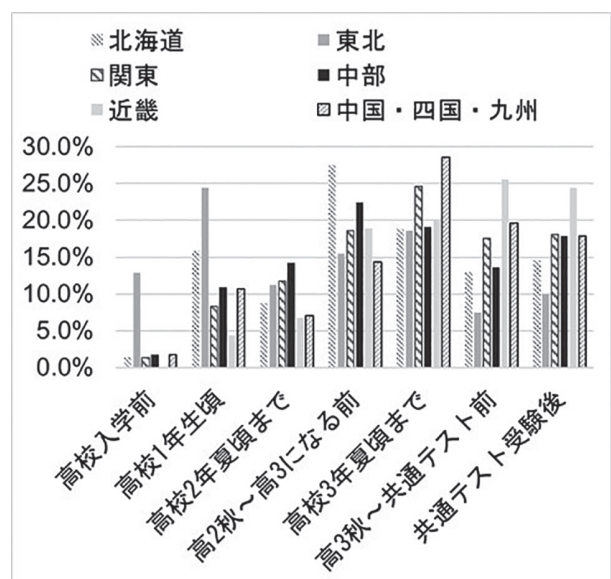


図3 志願先決定時期と出身地域

3.3.3 学問分野との関連

学問分野（人文社会系、自然科学系、医歯薬系）と志願先決定時期の関連についてカイ二乗検定を実施した結果、両者の間には統計的に有意な関連が認められた ($\chi^2(12) = 60.76, p < .001$)。医歯薬系では「高校入学前」に志望を決定した割合が 11.6% と最も高く、早期決定の傾向が顕著であった。また「高校 1 年生頃」も 18.0% と高く、全体的に早い段階で進路を固める傾向がうかがえた。自然科学系では「高校 3 年生の夏頃まで」(23.3%) や「高校 3 年秋～共通テスト前」(16.0%) が高く、最終学年の夏以降に志望先を決定する割合が多かった。人文社会系では「共通テストの受験以降」の決定が 18.5% と他学部より高く、相対的に遅めの志望決定傾向が見られた。このように、学部によって志願先決定時期に明確な違いがあり、進路の専門性や受験準備の必要期間が意思決定のタイミングに影響を与えている可能性が示唆された。(図 4)

3.3.4 選抜区分との関連

志願先決定時期と選抜区分との関連をカイ二乗検定で検討した結果、有意な差が認められた ($\chi^2(18) = 238.22, p < .001$)。特に、AO 入試 (AO II 期・AO III 期) による入学者では、高校 2 年夏以前に決定している割合が有意に高かった。前期日程は「高校 3 年生の夏頃」の段階で志願先を決定する割合が高く、20.5% となった。後期日程はさらに顕著で、「共通テストの受験以降」での決定が 44.6% と最も高い値を示した。(図 5)

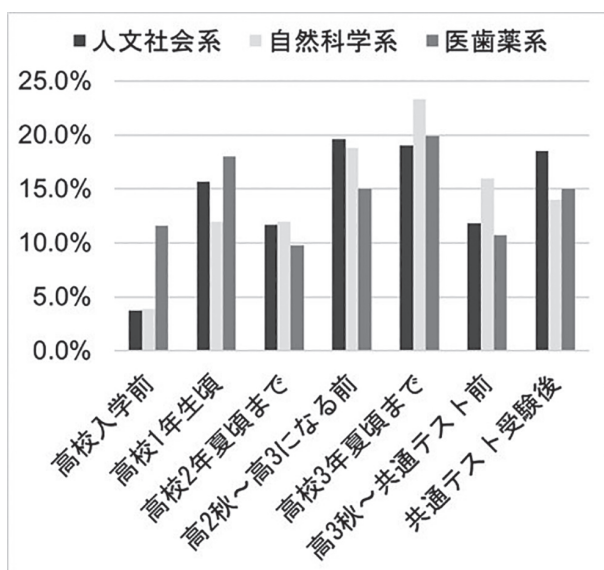


図 4 志願先決定時期と学問分野

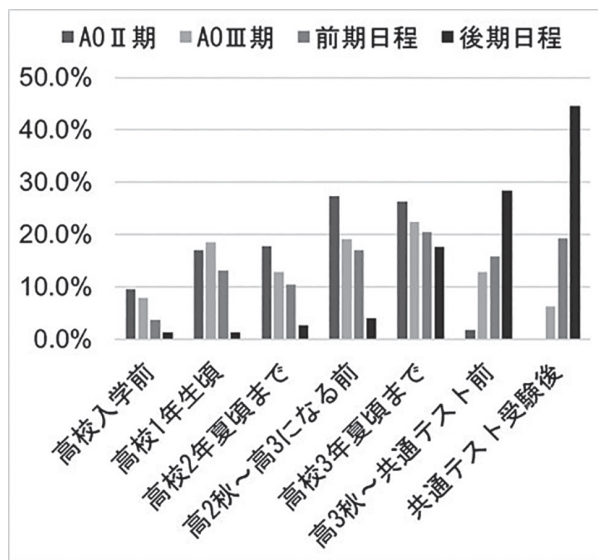


図 5 志願先決定時期と選抜区分

3.3.5 オープンキャンパス参加経験との関連

対面型オープンキャンパスおよびオンライン型オープンキャンパスの参加経験と受験決定時期の関連を検討した結果、いずれも有意な差が認められた (対面: $\chi^2(6) = 339.61, p < .001$; オンライン: $\chi^2(6) = 114.37, p < .001$)。

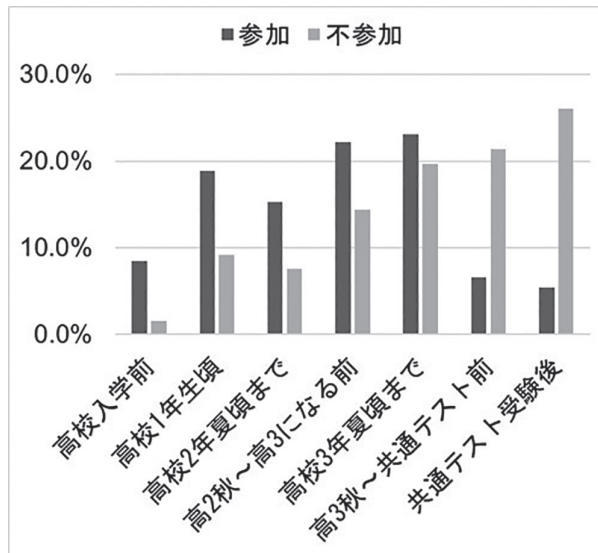


図 6 志願先決定時期と対面 OC の参加経験

対面オープンキャンパスの参加者は「高校 2 年生の夏頃まで」「高校 2 年生の秋頃から 3 年生になる前まで」に志願先を決定した割合が有意に高く、一方で非参加者は「高校 3 年生の秋頃から共通テスト前」「共通テスト以降」に決定した割合が高かった。(図 6)

オンラインオープンキャンパスについては、サイトの閲覧者は「高校 2 年生の夏頃まで」および「高校 2

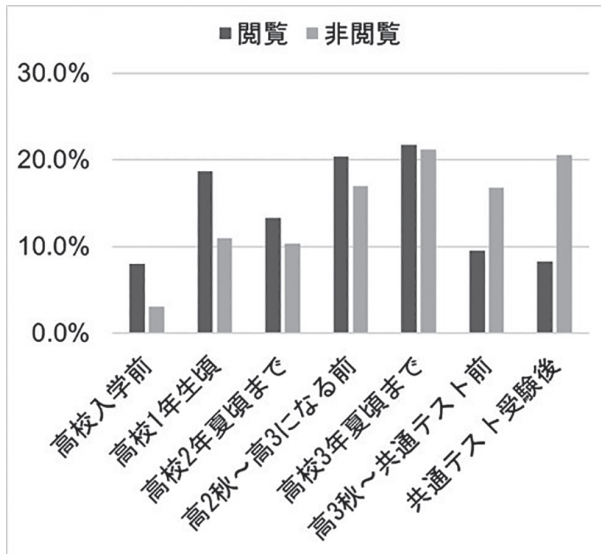


図7 志願先決定時期とオンライン OC の閲覧経験

年生の秋頃から3年生になる前まで」の志望決定が多く、未閲覧者は「高校3年生の秋頃から共通テスト前」および「共通テスト以降」に決定した割合が高かった。(図7)

3.3.6 進学説明会・相談会参加経験との関連

進学説明会・相談会への参加経験と志願先決定時期の関連についてカイ二乗検定を実施した結果、両者の間には統計的に有意な関連が認められた ($\chi^2(6) = 65.16, p < .001$)。調整済み残差の分析により、参加者は「高校2年生の夏頃まで」および「高校2年生の秋頃から3年生になる前まで」に志願先を決定した割合が高く、一方で非参加者は「高校3年生の秋頃から共通テスト前」および「共通テスト以降」に決定した割合が高かった。(図8)

4 考察

本研究では、東北大学の2024年度現役で合格した入学者を対象として、大学志願先の決定時期に関連する諸要因を分析し、進路選択行動の多様性とその背景要因を明らかにした。

まず、志望決定時期は「高校2年秋頃から高校3年夏頃」に最も集中しており、これは高校生の進路選択が本格化する時期と一致する。また、一定数ではあるが、高校3年秋以降に志望先を決定する層も存在しており、進路決定のタイミングには多様性があることが示された。この傾向は先行研究(国立教育政策研究所, 2021; リクルート進学総研, 2022)とも整合的であり、現役生における進路選択行動の実態として再確認された。

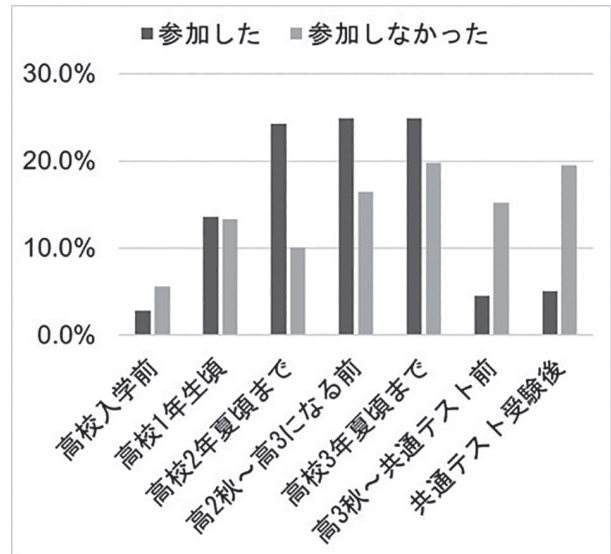


図8 志願先決定時期と進学説明会・相談会の参加経験

次に、属性ごとの違いとして、性別では女子の方が男子よりも早期に志望先を決定する傾向がみられた。これは、女子の方が進路選択が早期に進む傾向があることや、より計画的に受験準備を進める姿勢と関係している可能性がある。

出身地域による違いも顕著であった。東北出身者では「高校1年生頃」に志望先を決定した割合が高く、地元大学である東北大学への志望形成が早期に行われている可能性がある。一方、関東や近畿、中国・四国・九州出身者では「高校3年秋頃から共通テスト以降」にかけて志望先を決定する割合が高く、大学との物理的距離や選択肢の多さ、進学情報へのアクセス環境などが影響していると考えられる。

学問分野別にみると、医歯薬系の志望者は「高校入学前」や「高校1年生頃」に志望先を決定する割合が高く、極めて早期に進路を定める傾向が確認された。これは、医歯薬系が専門性の高い進路であり、長期的な学習計画や準備が求められるため、早期からの目標設定が不可欠であることに起因すると考えられる。一方、人文社会系では「共通テスト以降」の決定が相対的に多く、選択肢の広さや柔軟性の高い進路計画が影響している可能性がある。

選抜区分に関しては、AO入試群において早期決定の傾向が顕著であり、制度上、出願準備が早期に必要なことがその一因と考えられる。一般選抜では「高校3年夏頃」に決定する傾向が強く、後期日程では「共通テスト以降」の決定が最多となっており、試験結果を踏まえた最終判断の影響が表れている。

進学イベントの参加経験との関連においては、対面型オープンキャンパスや進学説明会・相談会の参加者

は非参加者と比較して早期に志望先を決定する傾向が確認された。これは、実際に大学を訪問し、教職員や在学生との対話を通じて大学への理解が深まり、志望校選定の意思決定が促進されるためと考えられる。特に対面型のイベントは、受験生にとって大学生活の具体的なイメージ形成を助け、学習意欲や進学動機の強化につながる可能性が高い。

進学説明会・相談会についても同様に、参加者では高校 2 年夏頃までに志望先を決定する割合が高く、比較的早期に進路を固める傾向が確認された。非参加者では「高校 3 年秋頃以降」に決定する割合が高く、進路決定が遅れる傾向が見られた。このイベントは主に 6 月～8 月上旬に開催されることから、その年の夏までの意思決定には影響を与えやすいが、秋以降に決定する層には効果が及びにくい可能性もある。

本研究の結果を踏まえると、大学の広報活動や高校における進路支援において、次のような実務的含意が導き出される。第一に、早期に志望先を決定する層に対しては、高校 2 年夏から 3 年春にかけてのタイミングで、対面型イベントを効果的に配置することが重要である。第二に、地理的に離れた地域や志望決定が遅れがちな層に対しては、より柔軟で時期を選ばないオンライン型の支援や情報発信が求められる。さらに、共通テスト以降に志望を決定する層に対しては、出願戦略の柔軟な設計や、直前期における的確な進路選択を支援する情報提供の工夫も求められる。

一方で、本研究には限界も存在する。たとえば、分析に用いた進学イベント参加の有無は「参加経験の有無」ととどまっておき、参加時期や参加回数といった詳細な行動履歴は含まれていない。また、在籍高校における進路指導体制の違いや家庭的背景といった影響因も、今後の分析対象として検討の余地がある。さらに、本研究では入学者全体を対象として分析したため、後期日程合格者の特徴を独立して検討していない点も限界として挙げられる。後期日程の志願行動に着目した分析は、今後の発展的研究として有用であろう。加えて、ICT を活用した進路支援の在り方についても、多様な決定タイミングに対応した情報提供やコミュニケーションの手法として注目されるべきであろう。

注

- 1) 進学説明会・相談会は東北大学主催の高校生・受験生・保護者を対象とした広報イベントである。毎年、全国主要都市（札幌、東京、静岡／浜松、大阪、福岡）にて 6 月～8 月にかけて開催する。
- 2) 図中の志願先決定時期の選択肢は、レイアウトの都

合により略称を用いている。正式名称と略称の対応は以下のとおりである。高校 2 年生の夏頃まで（高校 2 年夏頃まで）、高校 2 年生の秋頃から 3 年生になる前まで（高 2 秋～高 3 になる前）、高校 3 年生の夏頃まで（高校 3 年夏頃まで）、高校 3 年生の秋頃から共通テストの受験前まで（高 3 秋～共通テスト前）、共通テストの受験以降（共通テスト受験後）。

謝辞

本研究はJSPS 科研費 JP21H04409, JP24K16703 の助成を受けた研究成果の一部である。

参考文献

- 平田利文・杉山佳宏 (2003). 「高校生の進路選択自己効力感と関連要因の検討」『比治山大学・比治山女子短期大学紀要』 **10**, 1-9.
- 国立青少年教育振興機構 (2023). 『高校生の進路と職業意識に関する調査報告書－日本・米国・中国・韓国の比較－報告書』国立青少年教育振興機構。
<https://www.niye.go.jp/pdf/houkokusho20230622.pdf>
- 国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター (2013). 『キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査 第一次報告書』国立教育政策研究所
https://www.nier.go.jp/shido/centerhp/career_jittaityousa/pdf_2/rpt-all.pdf
- 国立教育政策研究所 (2021). 『高校生の高等教育進学動向に関する調査研究 第一次報告書』国立教育政策研究所
https://www.nier.go.jp/05_kenkyu_seika/pdf_seika/r03/r040121-01_honbun.pdf
- 荻谷剛彦 (2001). 『階層化日本と教育危機—不平等再生産から意欲格差社会 (インセンティブ・ディバイド) へ』有信堂高文社。
- 林如玉・倉元直樹 (2022). 「大学進学における進路選択プロセスに関する日中比較研究—情報収集活動を中心に—」『日本テスト学会誌』 **18** (1), 39-55.
- 林如玉・宮本友弘・倉元直樹・長濱裕幸 (2023). 「オープンキャンパスの参加形態が志望決定に及ぼす影響—東北大学を例として—」『大学入試研究ジャーナル』 **35**, 31-38.
- 林如玉・宮本友弘・大野真理子・倉元直樹・長濱裕幸 (2025). 「高校生の志願先決定時期に関連する諸要因の検討—東北大学合格者の分析から—」『令和 7 年度全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会 (第 20 回) 研究発表予稿集 (オープンセッション用)』, 58-63.
- 文部科学省 (2010). 「高等学校の教育改革に関する推進

状況」中央教育審議会初等中等教育分科会高等学校教育部会資料.

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo10/shiryo/_icsFiles/afieldfile/2010/02/12/1289068_3.pdf

永作稔・新井邦二郎 (2001). 「高校生用進路決定自己効力感尺度の作成の試み」『教育心理学研究』 **49** (2), 153-161.

永作稔・新井邦二郎 (2002). 「高校生用進路決定自己効力感尺度の因子妥当性の検討」『パーソナリティ研究』 **10** (2), 140-141.

リクルート進学総研 (2022). 『進学センサス 2022』リクルート進学総研

https://souken.shingakunet.com/research/pdf/2022_sensasu_report.pdf

山口泰史 (2022). 「高校生の大学進学希望形成時期と教育達成における階層差の形成—JLSCP2015-2018 データの計量分析—」『教育学研究』 **89** (3), 13-25.